

性同一性障害者の認知機能・心理学的特性に 性ホルモンが与える影響についての研究

田中真理子¹⁾, 縄田 秀幸¹⁾, 永井 宏¹⁾,
田中謙太郎¹⁾, 浦島 創^{1),2)}, 矢野 里佳¹⁾,
西村 良二¹⁾

¹⁾ 福岡大学医学部精神医学教室

²⁾ はじめクリニック

要旨

背景: 性同一性障害とは、生物学的性別とジェンダー・アイデンティティー（性の自己意識）が一致せず、自らの性別に違和感や嫌悪感を感じる状態である。このうち生物学的性別が女性の場合をFTM (female to male)、男性の場合をMTF (male to female) と呼ぶ。一般に男性は数値計算や空間認知などに優れ、女性は言語能力などに優れるとされているように、人間には男女の性差によって影響を受ける認知機能が存在する。そのような認知機能や怒り・攻撃性といった心理学的特性が、性同一性障害者において身体的治療として行われるホルモン療法により変化するという新しい知見が発表された。しかし、その後の研究では同様の結果は再現されておらず、一致した見解はまだない。

目的: 性同一性障害者がホルモン療法を受けることにより、性差があるといわれている認知機能が彼らの自覚する性別に見られる傾向へ変化するか、また性ホルモン投与により心理学的特性が変化するかを検討する。

対象と方法: 平成19年4月から平成21年8月までに福岡大学病院精神神経科外来を受診したFTM症例を対象とした。14名のFTM症例がホルモン療法を受ける治療群として得られ、5名のFTM症例がホルモン療法を受けない対照群として得られた。治療群に対してはホルモン療法として、テストステロンエナンチオマーとして1回250mgを2週間ごとに筋肉内投与し、ホルモン療法開始前とホルモン療法開始3ヵ月後に認知機能検査4項目（3次元心的回転課題、標的当て課題、言語流暢性課題、ペグボード課題）と心理学的検査（Zung Self-rating Depression Scale: SDS, State-Trait Anxiety Inventory: STAI, Bem Sex Role Inventory: BSRI, State-Trait Anger Expression Inventory: STAXI）を行った。対照群においては、各認知検査の学習効果を評価するため、ホルモン療法を受けない状態で3ヵ月間の間隔をあけて治療群と同様の認知機能検査が施行された。

結果: 治療群において認知機能検査のうち、3次元心的回転課題がホルモン療法開始3ヵ月後に有意に得点が高くなっていた。対照群においては、いずれの認知機能においても3ヵ月後に学習効果による有意な変化は認めなかった。心理学的検査のうち、抑うつを示すSDS、不安を示すSTAIでホルモン療法3ヵ月後に有意に改善がみられた。

結論: FTMに対する男性ホルモン投与は、認知機能のうち空間認知機能を向上させ、心理学的特性において、抑うつ・不安を軽減させたことから、ホルモン療法が部分的に認知機能や心理学的特性に影響を与える可能性が考えられた。

キーワード: 性同一性障害, 認知機能, 心理学的特性, ホルモン療法